

日頃続けて来ている近所歩きも、雨天を口実のさぼりも出来ず毎日出向いてはいますが、昨今日中は勿論、夕方も5時を過ぎてもアスファルトの蓄熱？で汗まみれ・・・必然的に10時以前の出発、それも日陰を選んでのルート選びとなっています。

本来この「花だより」は、健康維持のための近所歩きとその間に観られた庭木や公園樹の開花を中心とした姿を記憶にとどめる目的での自身のメモ書きとして始めたものでした。最近のある新聞には「国際健康研究所」の発表として・・・「歩くほど効果」として下記の記事が掲載されました。

「1日に4000歩程度を歩くだけで、歩かない場合よりも死亡リスクを減らす効果がある」との研究結果が発表された。ポーランドのウッジ医科大学の研究チームが世界27万7000人を対象に平均7年間実施された先行研究データを分析した。英BBC放送は「1日1万歩が健康維持に必要な魔法の数字と言われて久しいが、新たな研究によると、5000歩未満でも効果が期待できる」と伝えた。最近の、英国の医療専門誌に掲載されたもの。1日約4000歩で、あらゆる原因による死亡リスクが減少し始めるという。心筋梗塞などの心血管疾患による死亡リスクについては、約2300歩で効果が出るという。また、この歩行による健康効果は、年齢や性別、移住地域に全く認められた。」とのこと。

こんなことは知らず脚力維持の為にと思い始めた近所歩きも5年目となりますが上記の記事にも裏付けされ、今後も続けて行きたいと思っています。また、最近「記憶力」の衰えを感じてきている「頭」の方の健康維持の為に個人のメモ書きであるこの「便り」も続けて行けたらと思っています。お目ざわりかも知れませんが、お付き合い頂ければ幸いです。また、時には情報やご意見お聞かせ頂ければと思っています。

いつもながらお天気の話からの書きはじめです。

1. 最近の天候とこの夏の気象予報。

1-1. 梅雨

梅雨の語源は・・・1. 中国でちょうど梅の実が熟す所に降る雨なので「梅雨」と呼んでいたのが日本へ伝わった。2、カビ（黴）がよく生える時期なので「黴雨（ばいう）」と呼んだ。3、くさるという意味の「潰える（ついえる）」から変化した。というのが、主な説のようです。

・梅雨入り日は地域ごとに、前後の気圧配置、降雨の状況からほぼ即日に出されますが、梅雨明けについては違ってきます。梅雨時の気候の変動から遡って地域ごとに後日に決められます。年によっては、決まらない年もあるようです。今年の梅雨明けは何時になるのでしょうか？今年は太平洋高気圧がかなり強いので早いのでは、とは思いますが。

・なお、今年の近畿地区の入梅は平年より3日遅れの9日と発表されました。昨年のように10数日も遅れることはありませんでしたが、4、5日はそれらしき天候も続いたものの、その後は太平洋高気圧の張り出しで、梅雨前線が一時消滅？真夏を思わせるような日々が続きました。お陰で、6月中旬に予定されていた科やMNCの野外観察会等も雨天中止は全くなく計画通りに実施できました。その後も数日雨や曇りの日があったものの6月下旬～7月始めにかけては「夏日」に逆戻りとなり、何と近畿地方に対しては6月27日、観測史上最も早い梅雨明けとなりました。

今年の太平洋高気圧の勢力が予想以上に強く、西への張り出しが強い結果だと思われます。暑くて長い

夏となりそうです。熱中症警戒アラートなども多発されそうです。

1-2. 夏至

ご承知のように夏至とは一年でもっとも昼の時間が長くなる日のことで、二十四節気のひとつです。今年は6月21日(土)が二十四節気の「夏至」の日でした。太陽が真南に来る南中の時の位置が1年で最も高くなるため、影の長さは1年で最も短くなります。昼が最も長く、夜が最も短い日でもあります。

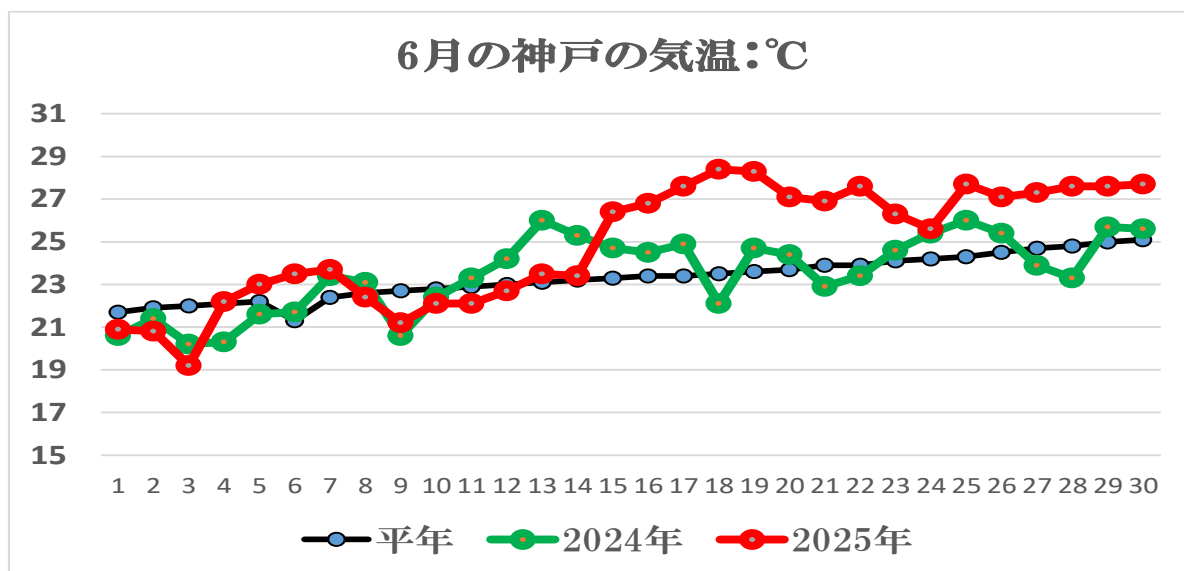
(因みに、神戸での日の出は午前4時46分、日の入りは19時16分、南中時の太陽高度は78.7°。) 早いもので、今年も半年も過ぎ、これからは日長も日に日に短くなるのですが・・・暑さはこれから、体調維持に努めましょう。

1-3. 今年の6月の神戸の気象

近畿地区の6月の気象予報では平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

気温：低 10 並 30 高 60% 降水量：少 30 並 30 多 40%

でした。また、近畿地方太平洋側の1ヶ月予報では1, 2週の気温は平年並みか若干高め、3, 4週は高い確率60%、降水量は平年並みか多少多い(40%)としていました。



実際には、期間の日平均気温は 6月 24.7℃ (平年 23.4℃) 降水量 215mm (平年 177mm)、であり、6月の3ヶ月間の気象予報、及び上記の6月単月の週間予報も見事に的中したことが分かります。

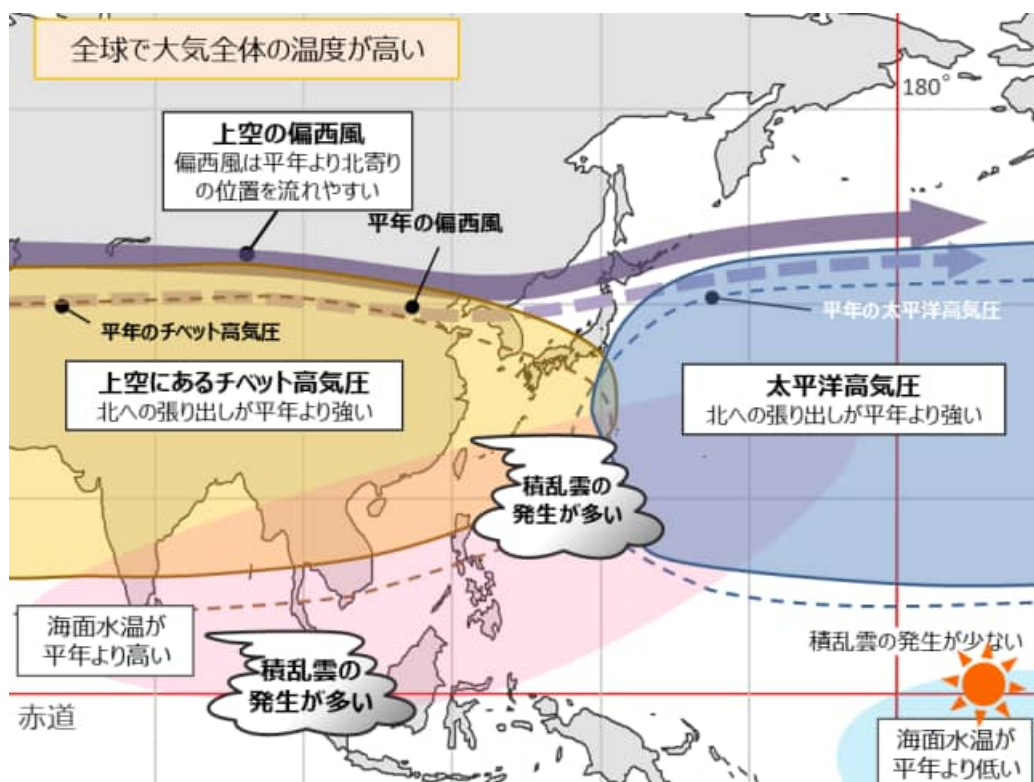
気象予報も、気象衛星などを使つての観測技術の向上、及びスーパーコンピュータによる解析・予報技術の向上で正確性も増して来ているように思います。(日本全体では6月、平年より2.31℃高い気温が記録され観測史上最高。神戸の後半はそれ以上であったかもしれません。)

勿論、1ヶ月や3ヶ月の長期予報は近畿地区等広域的に出されますが、最近では気象庁は毎日、以降1週先までの地域別の天候予報(天候・降水確率・気温)をA~C区分(確率)で発表していますので、これを利用して場合によっては行事の開催日の変更なども行つて来ています。

(なお、この予報は主要都市基準?近畿地区では大阪のみ……。なお、各気象予報会社もさらに細かい地域区分で向こう1週間、10日或いは2週間の予報を発表していますが、信憑性は未確認です。)

1-4. 今年の7月以降3ヶ月の気象予報(6月25日・気象庁発表)

*北半球太平洋側の気圧、偏西風の状況、先月と変化なし。次ページ図参照。



- ・ 全球的に気温が高い（地球温暖化の影響）
- ・ 上空の偏西風平年より北寄りの位置となる。
- ・ チベット高気圧・太平洋高気圧が日本付近の北側まで張り出す。
- ・ 積乱雲の発生は昨年同様南太平洋で多い。（台湾・南西諸島への影響大？）

1－5．近畿の3ヶ月予報（大阪管区気象台6月25日発表）

- ・ 向こう3か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高いでしょう。
- ・ 向こう3か月の降水量は太平洋側では平年並でしょう。

*気温 低 10 並 30 高 60% 高い見込み

*降水量・太平洋側 少 30 並 40 多 30% 平年並の見込み

*月別の予報

- ・ 7月：期間の前半は、太平洋高気圧におおわれやすいため、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。期間の後半は平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温：低 20 並 30 高 50% 降水量：少 30 並 30 多 40%

- ・ 8月：平年と同様に晴れの日が多いでしょう

気温：低 20 並 30 高 50% 降水量：少 30 並 30 多 40%

- ・ 9月：天候は周期的に変わるでしょう。

気温：低 20 並 30 高 50% 降水量：少 30 並 30 多 40%

昨年同様又はそれ以上に、暑い夏となりそうです。また、熱中症警戒アラート、熱中症特別警戒アラート（前日 17 時、及び当日の朝 5 時）の発令も増えるのでは。

2. 花だより：季節の花

毎度のことながら、書き出しは気象の話となってしまいましたが、以下本題の「花」について気の向くままに順不同で書き下して行きます。

先報ではスモークツリーをはじめ、この附近で見られ少しは珍しい？庭園木や野生化し拡大の見られる樹木について記述しました。本報でも取り敢えず少しは珍しいのかと思える庭園木から書き下して行きたいと思います。

2-1. ビヨウヤナギとコボウズオトギリ

先報では、梅雨の時期に比較的大型の黄色の花をつけるキンシバイとオオキンシバイについて記述しました。これ等とは若干花期が遅くなりますが、よく似た大型の黄色の花をつける「ビヨウヤナギ」があります。本種に関しては古くから園芸用に植栽されてきていたのでよくご存じのことでしょう。こちらの方がキンシバイに比べ花糸が長く黄色いので金糸と言えそうですが・・・中国原産、日本には江戸時代に入ってきたとされています。名の由来は、枝先がやや垂れ下がり葉がヤナギに似ているので、ビヨウヤナギと呼ばれるが、勿論ヤナギの仲間ではありません。キンシバイ同様オトギリソウ属の常緑低木です。



最近、この花を小形化したような黄色の花糸が目立つ花が植栽されているのを知りました。こちらは花の後に、赤色の果実を残すので、これも好まれ植栽されているよう

です。和名（園芸種名）も果実の形状からコボウズオトギリ（ヒペリカム・アンドロサエマム：学名：Hypericum androsaemum）。ヨーロッパ原産で、オトギリソウ科オトギリソウ属の半落葉小低木です。和名ではコボウズオトギリ（小坊主弟切）、英名では Tutsan（小坊主という意味）と呼ばれます。和名の「小坊主」とは花の後に成るつやつやの果実が小坊主の頭を思わせることによるとのことです。（画像参照）

2-2. ギンバイカ（銀梅花、マートル）

フトモモ科ギンバイカ属の常緑低木。地中海沿岸が原産地。夏に白い5弁の花をつけ、雄蕊が多く目立ちます。果実は液果で、晩秋に黒紫色に熟し食べられとのこと。下記のように、ヨーロッパでは珍重されているようですので加えて置きます。言われなどご存じかどうか数か所で見られる花木です。純白の花の美しさから愛



と美の象徴とされ、古代は女神に贈る花と言われてきた歴史もあります。また、ヨーロッパでは古くから神聖な樹とされ「祝いの木」とも呼ばれて結婚式にも使われてきました。現在でもヨーロッパの結婚式の装飾や花嫁のブーケの材料にギンバイカ（銀梅花）が使われているとのこと。

2-3. ネムノキ

名の由来は夜になると小葉が閉じて垂れ下がる就眠運動を行うことが知られ、この姿から。漢字での表記は「合歓」小葉を男、女に例えたものとか・・・。

通常花は淡紅色、15～20個の花が長い柄の先に集まって同時に開くので、梢が灯火で飾られているように見えます。花といっても見えているのは花びら（花弁）ではなく雄しべ。5枚の花弁はごく小さくて目立たず、長さ3～4cmほどの糸のような雄しべが沢山あり、しかもこの雄しべは先は淡い紅色、基部は白く染め分けられています。絹糸を先端でパッと散らしたような優しい花が咲き、おまけに灰かに桃の実に似た甘い香りを放ちます。



こんな花の姿は、昔から人々に愛されたようで「ねぶ」の名で万葉集にも登場します。後年芭蕉が詠んだ、「象潟や雨に西施がねぶの花」（奥の細道）は特に有名ですが、旅の途上雨の中で難渋しながらも夕刻に景勝の地であった象潟（現秋田県の南部）に到着した折に詠んだ句とされています。雨に濡れたネムノキの花は、睫毛を閉じた美女の憂愁のさまを思わせるに十分なものがあるのでは。附近のマンションの庭には白色の花をつけるネムノキも植えられていますが、やはり紅色が一番です。先日の「あいの里山公園」での観察会でも花期の終わりがちですが良く見かけました。

2-4. アジサイ

今年は、早々に梅雨明け宣言が出されてしまいましたが、梅雨時の花木の日本の代表は「アジサイ」を於いてはないでしょう。再々述べて来ている気象庁の「生物季節観察」に残された、日本の代表的植物として、ウメ、サクラと共に残された花木は「アジサイ」なのです。

因みに、今年の近畿地区の「アジサイ」（真の花）の開花期日は下記のように発表されています。

地 域	開花日	平年比	昨年比
大 阪	6 月 6 日	1 日早い	2 日遅い
京 都	6 月 5 日	8 日早い	2 日遅い
神 戸	6 月 9 日	1 日遅い	4 日遅い
奈 良	6 月 10 日	4 日早い	12 日遅い
和歌山	6 月 5 日	2 日早い	3 日遅い
彦 根	6 月 25 日	5 日遅い	13 日遅い

彦根を除き、平年よりは若干早め、昨年に比べると地域差のある者の2～12、3日遅いという記録であったと言えるのではないのでしょうか。アジサイはガクアジサイと異なり、真の花は装飾花の下にあること、一株でも普通十数個花序がつくので開花の確認はウメやサクラのように簡単ではないと思われます。

・参考までに大阪管区気象台のアメダス内に植栽されているアジサイの標準木の画像を添付しておきます。

・ご承知でしょうが**アジサイ**は「アジサイ科」の落葉低木で日本固有種、名の由来は集真藍（あずさあい）、つまり真の藍色の小花が集まった姿から付けられたという。ガクアジサイが母種とされ、藍色の花弁に見えるものは、実はガク片で本当の花弁はごく小さく目立ちません。（真の花には雄しべも雌しべもありますが結実はしません。）

一方、アジサイの花の色は栽培される土質に大きく影響され、酸性の土壌では青色系、アルカリ性の土壌では紅色系が映えたとされます。また、花の咲き始めから白や薄緑、薄青、淡紅、藍、紫などへと日を追って花色を変えるので、「七変化」などという別名もあります。これに因むのか花言葉は「移り気」。中国名は「八仙花」。『万葉集』には「よひらのはな」（四枚の花びらの意味）として登場します。

ただ、この附近では上述のような日本アジサイ系の花木は殆ど見られなくなり、家庭で植栽されているのは、殆ど背が低く、花色にも多様性のある所謂セイヨウアジサイのたぐいか、アメリカを原産とする白色系、房状の白色花をつけるカシワバアジサイ（秋の紅葉も楽しめる？）が殆どとなって来ています。また、アジサイの特徴であるよひらのガク片でなく八重咲き系も増えて来ています。



なお、先日の田中修先生の公開講演会では「アジサイ」の葉の毒性に関して「青酸化合物」と断定されましたが、国・厚生省は「現時点でも有毒物質は不確定・ただし有毒性であることには間違いないので食用に供しない様」としています。

2-5. ジョウザンアジサイ（常山陽花） *Dichroa febrifuga*.

この辺りでは見られないアジサイ科の花木です。Tさんから情報の提供をいただきましたので、上記の日本アジサイの毒性に関連し掲載させて頂きます。ジョウザンアジサイとは、コアジサイと同様に、装飾花と言われるガクを持たず、両性花のみからなるアジサイで、中国南部、ベトナムなどが原産地と言われています。また、アジサイお仲間では珍しく、秋に瑠璃色の果実をつけるとのこと。名の由来も中国の自生地、常山に因み付けられたようです。アジサイと同様有毒性とされていますが、根などに含まれるアル

カロイドには抗マラリア作用があり漢方薬として用いられるそうですが、同じ作用を持つキニーネよりもヒトマラリアに対しては効力が弱、副作用として悪心、嘔吐、下痢、胃腸粘膜の充血出血を起こし、キニーネよりも毒性が強いとのこと。日本では、薬学部をもつ大学や製薬会社の薬草園等に植えられているようです。



3. ツタ

なぜこの季節になぜ「ツタ」と思われる人が多いのではないのでしょうか？ツタなど秋の紅葉時の葉面のインプリの1ポイントガイドの材料に過ぎないと思われているのではないのでしょうか。

「ツタ（蔦：*Parthenocissus tricuspidata*）は、ブドウ科ツタ属のつる性の落葉性木本。山野に生える。別名、アマヅラ、ナツツタ（夏蔦）、モミジツタ。和名の由来は、他の木や岩肌につたって伸びる様子「つたって」が転訛したものとされます。中国名は「地錦」。日本では北海道・本州・四国・九州の低地に分布します。山の林や岩肌にふつうに自生します。木の幹にびっしり張り付いているほか、街中では建物の壁や塀の一面を覆うことも多くこの辺りでは良くみかけます。



では、次の設問に答えられますか？

- ①ツタはブドウ科の落葉性の蔓性植物ですがその根拠は
- ②ツタはどのような手段で木や壁を登るのでしょうか
- ③秋にツタが散る時、葉柄を残し葉身のみが先に散ることが多いがどうしてでしょうか
- ④右の写真のように、壁面に取りついたツタの葉は全てが陽光を受けるように配列できるのか
- ⑤別名「アマヅラ」の語源をご存じでしょうか

①、②は下の写真が回答です。



ツタの花



果実：ブドウ果



気根の先の吸盤

＊この季節でないと観察出来ないツタの生き様です。果実は秋までには落ちてしまいます。

③元々ツタは三出複葉であった？

先祖がえりか右のような蔓に出会うことがあります。また、初期に開葉する葉も三出複葉であることも多々あります。さらに2



葉が合着した変形の2葉の複葉も見られ、最後は3葉が合着し単葉となる様子が分かるかと思います。

ただ、普通に見ただけではツタの葉は単葉ですが、葉柄の先で三葉が合着したものである為、合着部に離層が出来、葉身のみが落葉、葉柄が残ると考えられるのではないのでしょうか。



なお、ツタの葉柄には更なる秘密があるのです。その答えが④に關係しているのです。一度、ツタの葉の葉柄をご覧になって下さい。通常樹木の葉の葉柄は葉身を支える為、維管束や繊維質、皮層組織等で補強され硬い構造になっているのが普通です。ところが、ツタの葉の葉柄は如何でしょう。



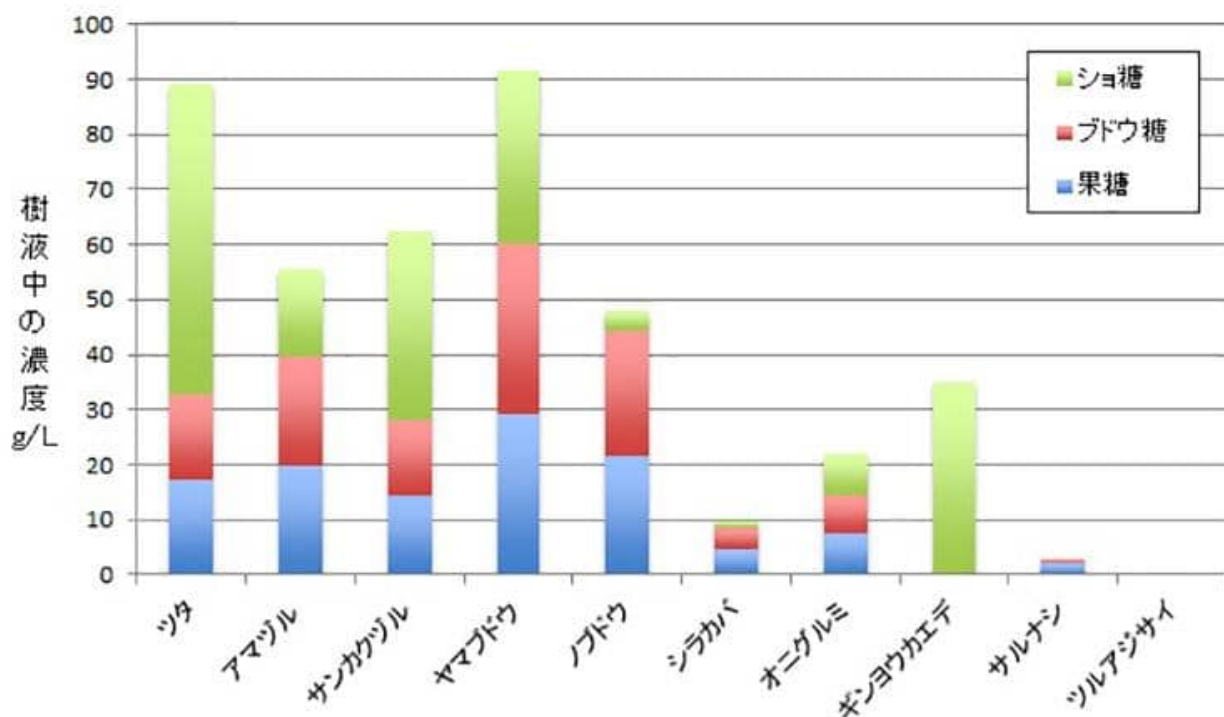
左は葉柄の一例です。この画像でも葉柄が普通の樹木のものとは異なることが分かるかと思います。長くみずみずしいと感じられるのではないのでしょうか。実際に触れば全く木質感はありません。また、葉柄の長さもこれが最大ではありません。中には30cm近い葉柄も見られます。葉柄の長さは初めから決まっているのではなく、葉に十分日光が当たるよう伸長して行き、結果として葉の面々が壁のように見えているのです。一度、舞台裏をのぞいてみて下さい。④の答はお分りでしょう。

⑤は枕草子や源氏物語など古典に記載される「あまづらせん」をご存じなければ回答できないでしょう。

甘葛煎（あまづらせん）は、奈良市の長屋王邸跡から「甘葛」と書かれた木簡が見つかっており、奈良時代初期には確実に存在した甘味料です。平安時代には『枕草子』にも登場しますが、江戸時代には原材料も製造方法もわからなくなっていました。その後、奈良女子大などの再現実験などから、「冬季にツタの蔓から採取した樹液を煮詰めた甘味料」のことが通説となっています。

元々、ブドウ科の蔓植物の茎には「甘味」成分が含まれることが知られ、ヤマブドウの仲間である「アマズル」など名の由来は「蔓の断面を舐めると甘い」からだそうです。

*最近、「あまあずらせん」に関連して「ブドウ科」の蔓などの甘味成分、含量等調べられたデータが公表されているので借用しておきます。



引用：サイエンス・ポータル (Science Portal) 科学技術振興機構

*なお、ショ糖 (砂糖) の甘味を 1.0 としたとき、ブドウ糖は 0.6 ~ 0.7, 果糖 (フラクトース) は 1.2 ~ 1.5 である。

*甘味成分含量や入手し易さ、甘味 (爽やかな甘さ) などから、「あまあずらせん」はツタの樹液から得られたものであろうというのが通説となり、これが得られるつる植物として「アマズラ」の別名がつけられていることご理解いただけたでしょうか。

*何時もながら、無計画に書き連ねてきたら 9 ページとなりました。本当は 2 名の方から問い合わせや、画像をお送り頂いている樹木の「雌性先熟」「雄性先熟」などについても取り上げたいと思っていましたが、長くなりそうです。本件は紙面の関係で次号にて記述したいと思います。

なお、現在、及び今後「雄性先熟」の花の様子が観察できる樹木としては、

- 🍃 ナンキンハゼ …… 同一花序で
- 🍃 アオギリ …… 雌雄異花 (雌雄同株)
- 🍃 クサギ …… 同一花で

などあります。お近くにあれば観察してみてください。

*何時もながら・・・ご質問、ご意見、情報提供等大歓迎です。本報はこれまで。

以上